

氏 名	石 田 勝 正 いし だ かつ まさ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 687 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 52 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	先 天 股 脱 生 後 成 立 の 防 止 に 関 す る 研 究

(主 査)
論文調査委員 教 授 日 笠 頼 則 教 授 森 健 次 郎 教 授 伊 藤 鉄 夫

論 文 内 容 の 要 旨

(1) 新生児股関節検診

股関節の脱臼感及び整復感を触知して股関節包の弛緩性を見いだす click sign を指標にして、生後 24 時間以内に 5191 例の股関節を検診した。そして click sign 陽性例について経日的観察を行った。

その結果、click sign と開排制限とは互に関連性をもって変化し、この変化は下肢の肢位のとらせ方によって容易に影響を受けることが明らかとなった。その他、出生時に click sign 陰性症例の下肢を伸展位に強制すると、生後数日で新たに click sign の発現した例が発見された。更に重要なことに、生直後より自然のままの肢位（股関節は屈曲の強い外転肢位、膝関節は屈曲肢位）を妨げないように扱った群では、伸展位を強制して扱った群に比し、生後 24 時間以内の検診ですでに click sign の頻度が著しく減少した。

これらのことから、生直後から、すべての新生児を自然の肢位のままに扱うことによって先天股脱の成因の一つを除去することができ、これによって発生頻度を著しく減少させることができるとの結論に到った。

(2) 動物実験

家兎で行われた Michelsson の実験方法に従い、幼若ラットの後肢の膝関節を伸展位に固定して股関節も伸展位をとらせることにより、実験的股関節脱臼をつくった。そして固定期間と脱臼発生頻度との関係を調べた。これにより、幼若ラットの下肢の屈曲肢位を強制的に伸展させると正常な股関節に脱臼を誘発することが証明された。

(3) 先天股脱予防モデル地区の設定

上記の理論に基づき、京都市伏見区を先天股脱を減少させるモデル地区に設定し、社会医学的に発生防止実験を行った。その結果予期したように乳児期先天股脱を著しく減少させることができた。

以上のことから、あらゆる新生児に対する生直後からの育児法の改良が、先天股脱成立防止にとって最

も重要な基本的問題であるとの結論を得た。

論文審査の結果の要旨

新生児の下肢は自然に屈曲位をとっているが、股関節の安定性は下肢の肢位によって強い影響を受ける。下肢を伸展位に固定すれば24時間以内に亜脱臼または脱臼をきたす。これに反して、下肢の自然の屈曲位を妨げないようにすれば、股関節は安定し、脱臼を起こすことはない。実験的に生後4週間のラットの後肢の膝関節を伸展位に固定すれば、股関節も筋力によって伸展位をとり、4週間後には72%に脱臼が起こる。以上の事より、ヒトは生後数カ月間は、系統発生的に、4足動物と同様に下肢が屈曲位をとり、この時期に下肢を伸展すれば股関節が脱臼すると考えられる。このことからして所謂先天股脱は新生児の育児法を改善することによってその発生を予防することができると考えられる。京都市伏見区をモデル地区に設定し、新生児に改善オムツを使用して下肢の自然の屈曲位と運動を妨げない育児法を普及させた。その結果、この地区の先天股脱の発生率が激減した。以上の研究は先天股脱の発生予防に貢献するところ甚だ大である。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。